

学級集団指導論の展開

企画者 蘭 千壽（防衛大学校）・伊藤美奈子（お茶の水女子大学）
 司会者 蘭 千壽（防衛大学校）
 話題提供者 河村茂雄（岩手大学）・伊藤美奈子（お茶の水女子大学）
 松井 仁（新潟大学）・高橋知己（岩手県小屋瀬小学校）
 指定討論者 洲上克義（鹿児島大学）・秋田喜代美（立教大学）

＜企画主旨＞

「学級崩壊」現象が全国の小学校に広がっている。授業時間になっても教室に入ってこず、廊下で遊んでいる。授業中わけもなく立ち歩く。授業とは関係のないことを大声でし、数名がここに口論を始め、教師の注意を無視する。勝手なふるまいをする子どもたちで学級は騒然としている。この現象は数年前に首都圏の小学校高学年の学級で起こり、今日では地方都市の高、中学年の学級へと広がりをみせている。

本シンポジウムでは、このような「学級崩壊」現象の実態を把握するとともにそれらの原因の解明をおこないながら、「子ども一人ひとりが学級という集団経験をとおして成長する」ことを各自の諸論に依拠しながら学級集団指導論の展開を図ることを目的としている。いくつかの具体的な学級集団指導論を提供できればと考えている次第である。話題提供者はそれぞれのフィールドで優れた学級集団指導の実践研究をおこなっておられたり、スクール・カウンセラー業務に携わっておられる方々である。指定討論者の方々には、学級集団指導論の展開を学校・学級経営論の立場から、また教師の職能成長の立場から問題点の指摘をお願いしたい。当日は、フロアの方々とともに議論し考えを深めていきたいと考えている。

＜学級崩壊と教師の学級指導行動＞

河村茂雄（岩手大学）

学級崩壊は授業の不成立などで、生徒の学習が低下するだけでなく、規範を失った集団での生活が生徒の心の発達にも影響を与えかねない。

学級崩壊の背景には、家庭や地域社会のあり方、学級制度の問題など数多くの要因の指摘がある。そして「子どもが変わった」ということが強調され、その結果学級崩壊が起こるという展開である。だが、現在進行形で直接生徒に対応している教師は、それらの要因の変容を待ってられない。

「変わった子ども」の実体を理解し、それに応じた学級経営を展開するしかないのである。それは生徒の人間関係の形成を促進するような学級経営でもある。人間性の育成には集団体験をとおし

た体験学習が重要であり、家庭や地域社会でそれが少なくなった現在、学級集団をとおしてその体験を補う必要がある。それには日々の学級での諸々の生活経験がそのまま生徒にとって体験学習となるのが、理想である。授業や特別活動、行事などの取り組みの背景に生徒の人間性を育成するという目的が明確に意識され、諸活動が密接に結びつき、結合的に生徒の日々の体験学習を深める。そのプロセスをとおして生徒の人間性・心を育成するのである。

集団は個人を育てる。つまり、教師の援助も学級集団という環境側からなされる援助の1つであり、体験学習の意義に沿った指導や援助のあり方が重要である。のべ、教師400名と生徒800名に実施した筆者の調査でも、生徒の学級生活への意欲がとても高い学級と、意欲が著しく低下し、学級崩壊に至っている学級が見いだされ、そこに教師の指導行動のタイプに差があることが示唆された。教師は学級経営を従来の経験や勘のみに頼ることなく、生徒の内面を理解する工夫をし、集団形成における理論と方法を参考にした対応が求められる。それが学級崩壊を予防するだけでなく、心の教育の1つの具現化であると思う。当日は筆者の調査結果をもとに教師の指導行動のタイプ別に学級集団の状態と生徒個々の意欲について話題を提供したい。

＜教師の資質として求められる集団作り

とカウンセリング・マインド＞

伊藤美奈子（お茶の水女子大学）

近年、子どもの心の問題が複雑化し、授業妨害や学級崩壊といわれるようなキレル子どもたちへの対応に苦慮する教師が増えている。非社会的問題と反社会的問題の境界がなくなり、その対処方法をマニュアル的に当てはめることも難しくなっているというのが現状である。

そういう現状を受けて、教育センターなどでは、教育相談研修やカウンセリング研修に参加を希望する教師は年々増加の一途にある。しかし現状では、学校現場で教師がカウンセラー役を兼ねるのはそんなに安易なことではない。その背景にある

のが“個と集団のジレンマ”である。まず一つは子どもという存在がはらむ個と集団のジレンマである。子どもはかけがえのない個であると同時に、学級集団の一員でもある。教師が一人の子どもを大事にしようとするとき、クラス全体の歩みを止めたり全体の平等を欠くことがある。そして第2は、教師という存在が担っているジレンマである。教師自身、一教員としての顔と教師集団の一員としての顔を持っている。生徒指導は全教員が一丸となっておこなうことが求められるが、実際には自らの教育観と学校全体の教育方針とがずれることも少なくない。このように学校現場では、生徒という存在も教師自身も個と集団の2側面を同時に抱えながら、授業指導という集団活動と心理臨床的な個別の関わりが実践されているのである。

そういう二重のジレンマを抱えた学校現場で求められる教師の資質とはどのようなものか？ ①教師がめざすべき到達点はカウンセラーになりきることはない。学級集団を通して個を見ようとした場合、揺れや迷いがあるのが当然である。むしろその揺れや迷いに直面し踏みとどまることが大切であり、それこそが教師の成長を促進するであろう。②一生懸命すぎるのが仇になるという学校教育のパラドックスを自覚し、③子ども集団を見失わず、教師集団にも根を降ろせる、そんな資質が現場の教師には求められている。

〈学級のなかの子どもたちと教師〉

松井 仁 (新潟大学)

諸外国の学級風土の効果研究を見回しても、環境としての風土が生徒の学力や情意に関わっており、特に小学校段階においてその関わりが深いことが知られている。ここで、学級集団の醸し出す個性のようなものを指すのだが、これはそこに属する生徒の個性だけでなく、教師-生徒関係やそれに基づく教師の行動に大きく左右される。

「学級集団指導」という点からすれば、生徒特性の的確な看取りが要請される。ただ、人間関係の場での対象の看取りに求められる条件を考慮すると、把握する側の教師特性の自己知覚も同程度の重みを持つという議論にたどりつく。つまり教師自身が自らの個性や指導の特徴を自覚的に把握し、それが生徒のどのような相互作用を生み出して教師との関係を形成するかを考察することで、教師自身の学級への関与の自覚的な制御と学級風土の改善が見込まれよう。教職はとかく行動レベルでの対処に追われ、そこに注意資源を消費しがちな専門職と見なされがちである。しかし、その背景にある自身の個別的な枠組みにも関心を分配すること、学級集団より活性化される自らの特質

を自覚する意図的な努力を経ることが学級への関わりの変化と学級集団の持つ潜在的な力の看取りにつながるかと期待される。

教師用児童認知調査(RCRT)は児童把握の個別的な視点の探索方法である。これによって引出される教師の個別資料は教師と児童たちとの経験の凝縮したまさにその教師だから意味のある所産である。

従来この種の所産は教員各自の経験の個別性に高さ故に他者と共有されがたいと見られたものの、この方法はそれを他者とともに眺められるような資料に加工する試みとして価値がある。これを介して教師の個別的な「くせ」を他教師や専門家との関係で内省する機会を持つことが、生徒把握能力の高まりに貢献するのだろう。

人との関係重視の専門職として他に心理療法士があげられるが、この職での対象をとらえるための「私」の視点への探求とこれを練り上げるトレーニングは、教師にとっても参考になろう。自らの「くせ」の自覚という難事業に取り組んで、力量を高める上で、教職においても自身＝「私」に関与することを支援する外部専門家の役割が期待される。

〈子どもの自己創出と開かれた学級〉

高橋知己 (岩手県・小屋瀬小学校)

社会集団においては、ある意味コンフリクトはその存在の基底となる。個人と個人の間や集団内の軋轢や摩擦が出現するのは当然であり、むしろそれらを調整することで社会集団のアイデンティティを形成していくということが出来るのかもしれない。

ところが学級集団においてはその成立の背景における社会的要請の働きかけからコンフリクトを調整する作用がより頑健に緊縛した状態に設定されることが多い。こうした状態を〈閉じられた〉学級と呼ぶと、一方、個人が学級においてコンフリクトを経験し解決していくプロセスのなかで人間関係を自由に切り結ぶことを可能にした状態を〈開かれた〉学級と呼ぶことができる。そして〈開かれた〉学級では、学級集団における個人が自己を解体、再構築し自己創出していく作業がおこなわれる。

葛藤場面における調整の方法としての指導という名の下での抑圧がさまざまな問題状況を生みだしてきたが、こうした現実の状況を分析する一つの視点として「自己言及による自己創出システム」をここでは提案する。従来の学級集団発達論におけるいわゆる単線型の発達段階仮説や相互作用論からの転換を試みたい。